第2節 習い事・おけいこ事・家庭教師

東京の子どもはスポーツ系の習い事、北京、上海、台北の子どもは芸術系の習い事、ソウルの子どもは学習系の習い事をする傾向が高い。また、英会話などの語学を習う子どもは、どの地域でも一定の高い割合を占めている。

幼児の幼稚園、保育園以外の活動も、地域によってさまざまである。本節では、各都市の習い事事情をみてみたい。

習い事・おけいこ事（ソウル：課外活動、北京・上海：課外興趣班、台北：才藝班）といっても、主に先生がいる場所へ行って何かを学ぶというのが日本における一般的なイメージだろうが、他の都市のイメージはこれからは離れているようだ。たとえば北京、上海では、幼児園内で在園時間に習い事のオプションが用意されており、そこから親が選択するという形態が一般的なようである。また絵画を習う子どもは、他の子どもが自由に遊んでいるなかでも、遊びの輪から離れて、他の絵画を習う子どもと一緒に園内で絵画を習うという。ソウルでは、ブロック、ガーベ（恩物）などの遊び方や学習誌の内容を教えに家庭教師が家に来ることが一般的であり、習い事（課外活動）として認識されている。このように、習い事・おけいこ事（以下、習い事）は地域によってイメージされるものが異なることに注意しながら調査結果をみなければならない。

また、今回の調査を設計する際には、各都市における習い事の事情に十分注意を払いながら習い事の内容を取捨選択した。そのため、ソウルでは「学習誌」「ガーベ」「ブロック」「学院」「モンテッソリ」、北京、上海、台北では「囲碁教室」などが加わっている。

はじめに、習い事の内容を1つでも選択した割合をみてみると（**表1－2－1**）、この年齢の幼児はどの地域でも半数以上が習い事をしている。子どもの年齢別にみると、ソウルや上海では、3歳という早い段階から習い事を始めている比率が高い（ソウル60.3%、上海56.1%）。一方、北京、台北ではだいたい3歳児（北京34.1%、台北25.0%）と4歳児（北京63.7%、台北51.3%）の間で習い事の比率が急増しており、4歳児くらいから大半が習い事を始めるといえそうだ。東京では、4歳児でもすでに47.9%と2人に1人が習い事をしているが、5歳児では22.3ポイント増加し70.2%となるなど、習い事をする幼児は5歳児くらいの年齢で大幅に増えている。

■表1－2－1　習い事をしている幼児（全体　子どもの年齢別）

（%）

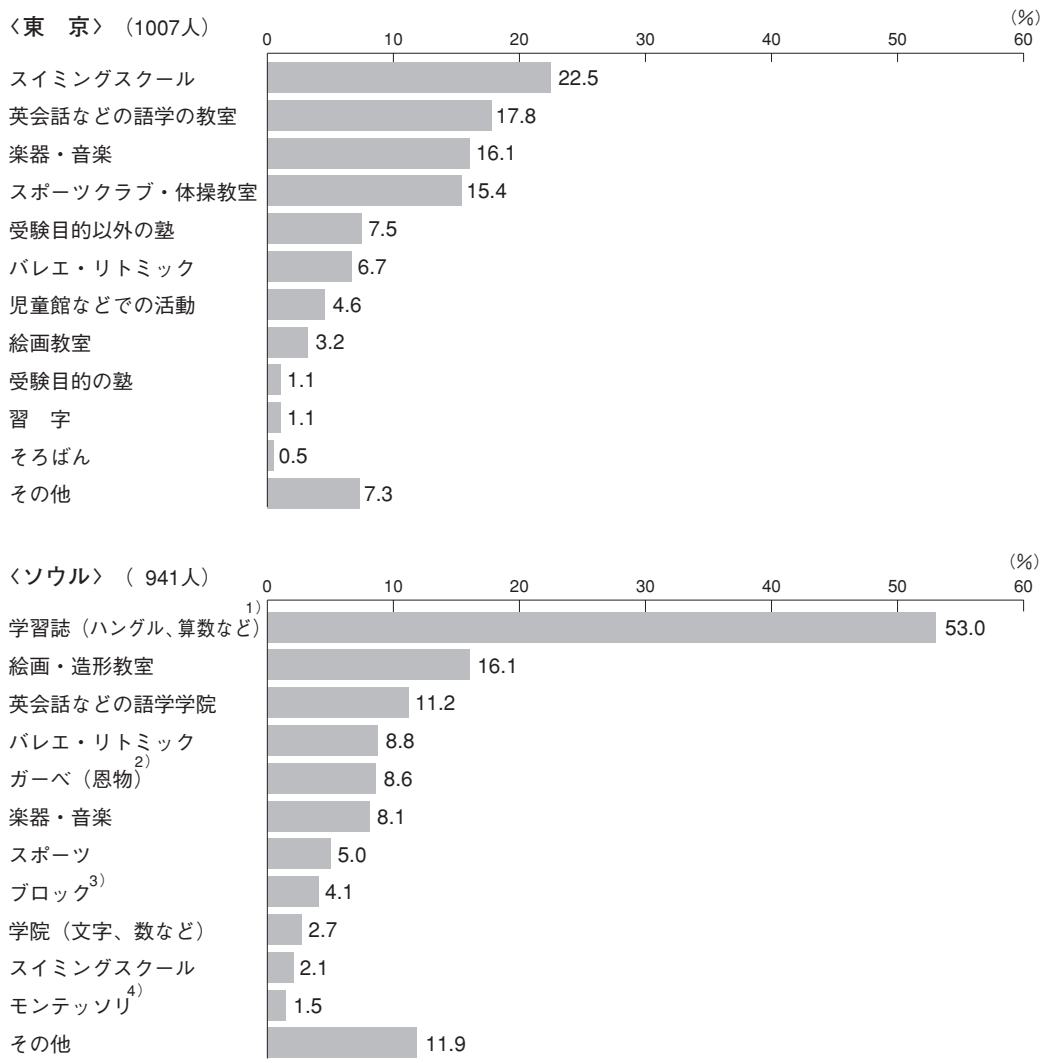
	東　京	ソウル	北　京	上　海	台　北
全　体	61.7（1007人）	72.6（941人）	64.6（992人）	78.4（935人）	56.4（2248人）
3歳児	43.9（ 279人）	60.3（168人）	34.1（193人）	56.1（164人）	25.0（ 180人）
4歳児	47.9（ 247人）	67.2（318人）	63.7（349人）	77.4（304人）	51.3（ 757人）
5歳児	70.2（ 260人）	78.8（386人）	75.4（330人）	89.0（301人）	71.5（ 648人）
6歳児	84.7（ 221人）	84.0（ 69人）	85.0（120人）	91.0（166人）	77.8（ 663人）

注1）「その他」を含むいずれかの習い事を1つでも選択した人の比率。
注2）網掛けは、年齢別にみたときに50%を超えていることを示す。

さらに、都市ごとにどんな習い事をしているのか詳しくみてみよう（**図1－2－1**）。東京では、「スイミングスクール」（22.5%）、「英会話などの語学の教室」（17.8%）、「楽器・音楽」（16.1%）の順に高くなっている。この後に「スポーツクラブ・体操教室」が続くなど、スポーツ系の習い事の比率が高い。

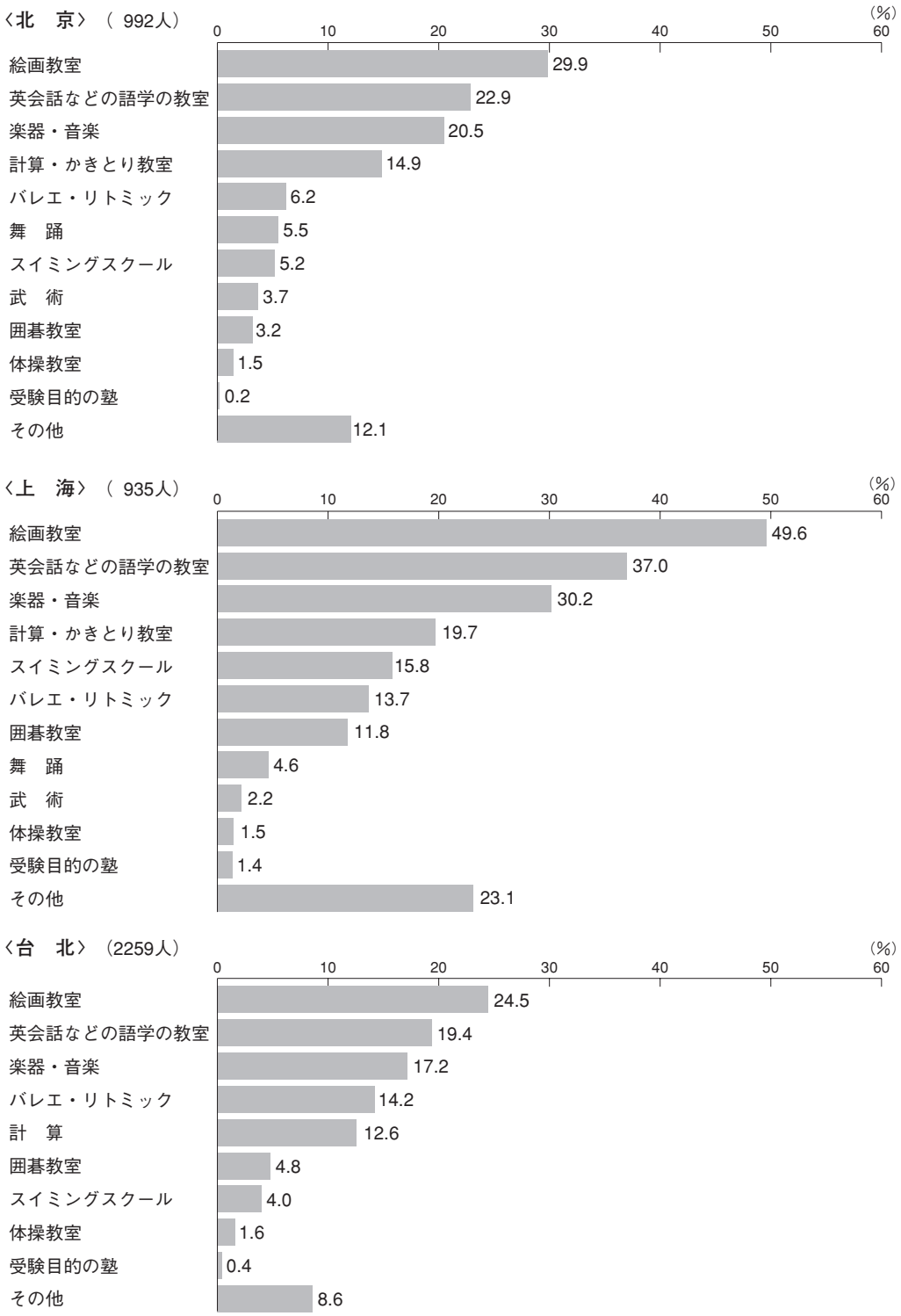
ソウルでは、「学習誌」（53.0%）、「絵画・造形教室」（16.1%）、「英会話などの語学学院」（11.2%）の順に高くなっている。とくに「学習誌」は他の習い事と比べて、とびぬけて高い様子だ。

■図1－2－1　習い事の内容



注1）複数回答。
注2）一部の項目は略記している。詳細は「調査票見本」（p.157）を参照のこと。
注3）韓国は就学前の幼児向け教育教材・玩具が充実しており、幼稚園・保育施設・学院（ハゴン）などの施設や一般家庭で多く利用されている。なかでも、1)学習誌：ハングル・算数・英語などの学習誌や教材のセット、2)ガーベ（恩物）：ドイツの教育者であるフレーベルが1837年に幼児教育に必要な遊具として考案した、一連の教育玩具の総称、3)ブロック：「レゴ」や「ブロックピア」を使ったブロック遊び、4)モンテッソリ：イタリアの教育者であるモンテッソリが考案した一連の教具を使ったモンテッソリ教育など専門の講師による訪問授業のサービスも提供していることが多い。

■図１－２－１　習い事の内容　〔続き〕



注１）複数回答。
注２）一部の項目は略記している。詳細は「調査票見本」（p.157）を参照のこと。
注３）北京・上海の習い事について、「その他」の具体的内容に「舞踊」「武術」が多く含まれていたため、項目として取り出して集計している。

韓国の習い事はどれも、日本で一般的な習い事とは異なるため、今回の調査では頻度や費用などについて、さらに詳しくたずねている。それぞれの習い事の学習時間、頻度、費用をみてみよう（**表1－2－2**）。「学習誌」は、「教材セット＋訪問授業」のようにイメージするのが適当で、学習誌の内容は、ハングル、計算、英語が主である。１回あたりの平均学習時間はおよそ30分で、頻度は平均週に１、２回くらいであるという。費用は月５万ウォン（5,781円）と、他の習い事と比較すれば高くなく、経済的にも手軽な習い事のようである。

「絵画・造形教室」は平均頻度がおよそ週に２回で、１回あたりの平均学習時間は１時間程度、平均費用は6,406円だ。これもソウルでは比較的普及している（16.1%）習い事といえそうだ。

平均費用が一番高く、10万ウォン（11,376円）にもなるのは、「英会話などの語学学院」である。費用の高さもあってか、学院で英語を習う子どもは１割くらいだ。子どもに英語を学習させたいものの、このように高い費用を払うことができない保護者は、上記の「学習誌」で英語を習っているのかもしれない。

「ガーベ」は、週40分前後のわりには、平均費用も６万5,000ウォン（7,694円）と高めである。それに対して「ブロック」は、週50分くらいで、平均費用は３万5,000ウォン（4,271円）で、比較的手頃な習い事といえるが、習っている子どもは全体の５％にも満たず、あまり多くない。「ガーベ」「ブロック」「モンテッソリ」などの習い事は、一部の限られた子どもが習うものであるといえそうだ。

ソウルでは、習い事としてはハングル、計算、英語などを習うために、「学習誌」、つまり「教材セット＋訪問授業」という形態が圧倒的な支持を得ているということが明らかになった。さらにいえば、この形態でさまざまな領域をカバーできるほど、「学習誌」＝「教材セット＋訪問授業」が発達しているということにも、ソウルの習い事事情の大きな特徴を見いだせるのではないだろうか。

北京では、「絵画教室」（29.9%）、「英会話などの語学の教室」（22.9%）、「楽器・音楽」（20.5%）の順に高くなっている。芸術系の習い事が多いようだ。

■表１－２－２　ソウルの習い事

	サンプル数	平均学習時間（分／１回）	平均頻度（回数／週）	平均費用（ウォン／１か月）	平均費用（円／１か月）
学習誌	414	25.7	1.71	49,838	5,781
絵画・造形教室	127	59.7	1.96	55,220	6,406
英会話などの語学学院	90	44.9	1.81	98,073	11,376
ガーベ（恩物）	78	42.4	1.06	66,330	7,694
ブロック	28	53.0	1.03	36,822	4,271
モンテッソリ	9	30.6	1.08	50,931	5,908

注１）無答不明の人は分析から除外している。
注２）平均費用（円／１か月）は１ウォン＝0.116円　（2005年12月13日現在）として算出した。

上海では、北京と同様に「絵画教室」(49.6%)、「英会話などの語学の教室」(37.0%)、「楽器・音楽」(30.2%)の順に高くなっている。上海でも芸術系の習い事が多いようだ。

さらに台北も、北京・上海と同様に「絵画教室」(24.5%)、「英会話などの語学の教室」(19.4%)、「楽器・音楽」(17.2%)の順に高くなっている。中華圏の3都市ではいずれも、絵画、音楽などの芸術系が高い様子だ。

上海では、いずれの習い事についても「している」比率が高い。実際、習い事の平均数をみると、上海では2つ以上と一番多く、反対に台北は一番少ない(図表省略)。

また、いずれの都市でも共通して上位3位までに入る習い事は、「英会話などの語学の教室」である。「英会話などの語学の教室」に低年齢のうちから親が通わせる状況は、東京のみならず、東アジアの各都市にも共通しているようだ。「英会話などの語学の教室」について、年齢別にみたのが**表1−2−3**である。上海では、5歳児から40%を超えており、6歳児ではおよそ2人に1人が英語などの語学を学ぶなど、非常に低年齢のうちから広く普及しているようである。また、北京においても英語などの語学を学ぶ比率は6歳児で30%を超えている。台北でも30%には満たないものの、6歳児では28.6%と4人に1人以上が学んでいることがわかる。なお、ソウルでは先にみた通り、語学学院に通う費用が高額であるためか相対的に比率が低くなっているが、語学学院に通わずとも、「学習誌」(とそれに伴う訪問の家庭教師)などによって英語を学んでいる幼児は多いものと推察される。

東アジアの幼児の英語学習状況について経年で比較したデータはないものの、この地域の英語熱は就学前の幼児にも及んでいるうえ、上海にみるように開始時期が早期化しているようだ。

さらに、各都市の大まかな傾向をつかむために、「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「バレエ・リトミック」「武術」をスポーツ系、「受験目的の塾」「受験目的以外の塾」「英会話などの語学の教室」「学習誌」「学院」を学習系、「楽器・音楽」「絵画教室」を芸術系として、各グループ最低1つ選んだ比率を次の**図1−2−2**に表した。スポーツ系の習い事を選択する比率は、東京が39.0%と一番高い。学習系を選択する比率は、ソウルが58.6%と一番高く、次に上海(45.3%)が続く。芸術系は上海が63.2%と一番高い。このように分類してみると、都市による習い事の選好にはそれぞれの特色があることがわかる。

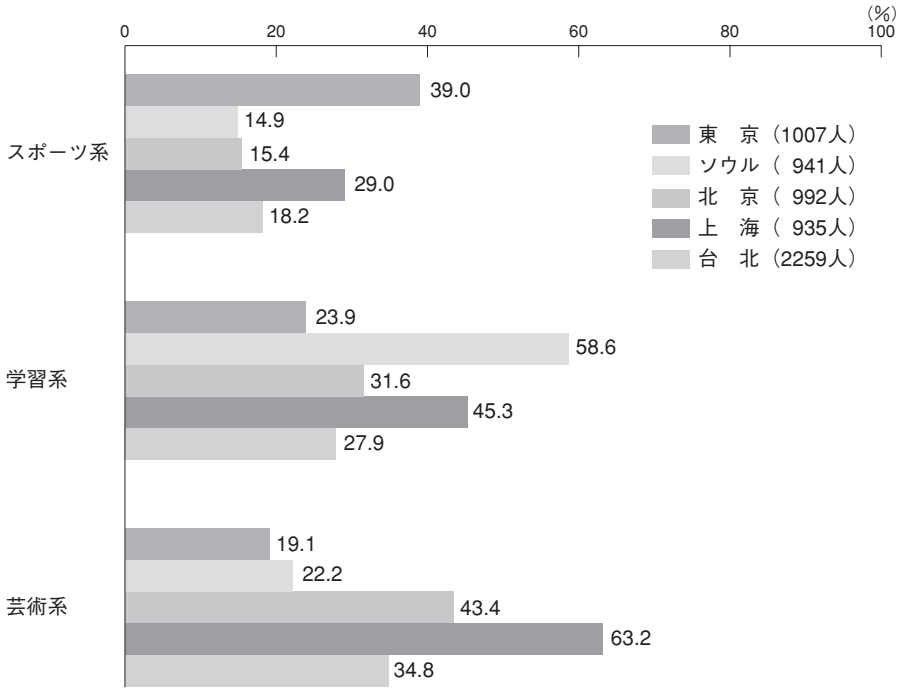
■表１－２－３ 「英会話などの語学の教室」の割合（全体　子どもの年齢別）

（%）

	東　京	ソウル	北　京	上　海	台　北
全　体	17.8（1007人）	11.2（941人）	22.9（992人）	37.0（935人）	19.4（2259人）
3 歳児	9.9（ 279人）	6.1（168人）	13.4（193人）	26.1（164人）	8.2（ 182人）
4 歳児	16.7（ 247人）	6.6（318人）	21.8（349人）	29.3（304人）	17.2（ 760人）
5 歳児	22.1（ 260人）	16.3（386人）	24.6（330人）	43.5（301人）	23.6（ 648人）
6 歳児	22.4（ 221人）	15.9（ 69人）	31.9（120人）	48.9（166人）	28.6（ 669人）

注１）薄い網掛けは、年齢別にみたときに20%を、濃い網掛けは30%を超えていることを示す。
注２）ソウルは「英会話などの語学学院」の割合。

■図１－２－２　習い事の内容（種類別）



注）スポーツ系は、「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「バレエ・リトミック」「武術」から最低１つ、学習系は、「受験目的の塾」「受験目的以外の塾」「英会話などの語学の教室」「学習誌」「学院」から最低１つ、芸術系は、「楽器・音楽」「絵画教室」から最低１つを選んだ比率。